

太政大臣三條實美殿

乙第百拾三号

露領ウラジオオストツクへ物産販賣

景況ノ義上申

露領ウラジオオストツクへ北海道物産輸出販賣ノ景況
等為視察先般彼地へ出張ノ節少書記官鈴木
大亮以下四名ヲ残置實地調査為致候處今般
別紙ノ通復命書差出候條此段上申候也

明治十二年十月廿日 開拓長官黒田清隆

太政大臣三條實美殿

付

13)

小官曩ニ露國浦嶺港汎遣ノ命ヲ奉シ物産見本ヲ函館丸ニ裝載ヒ五等屬村尾元長七等屬大槻直信御用係長野桂次即ヲ携へ彼港ニ至ル幾ナクシテ金剛艦ノ来ルニ會シ閣下ニ謁スルノ光榮ヲ得一等屬小野寺督一隨行ニ来ル親シク閣下ノ指畫ヲ奉シ現今販賣ノ景況ヲ視察シ將來貿易ノ方法ヲ調査ス是ニ於テ屢露國官吏ニ訪問シ遍ク本港商賈ニ適量ス而敬言察長セスケスキイニ囑シ見本ヲ其司ニ陳列シ豫メ之ヲ港内ニ告知シテ衆庶ノ縦覽ヲ許シ併テ商賈ノ品評ヲ經シニ物産概皆好声價ヲ得テ間々或ハ其價格ノ廉ナラザルト或ハ其好尚ノ異ナルトニ因テ販賣スル能ハザル者モ亦少カラズト雖モ其最モ本港ノ需用ニ適スル者ヲ査定シ其將來ニ消流スヘキ概額ヲ考覈シテ漸次之ヲ輸入セバ

必シモ利益ナレト為サス然レモ今小官ノ實視スル所ヲ以テ竊ニ之
ヲ論スルハ未ダ遠、貿易ノ繁盛ヲ期スル能ハサル者アリ何ト
ナレハ則本港ノ人口ハ滿州及ヒ朝鮮等聚散常ナキ、流民ヲ僞
テ壹万人ニ至テス其内殆ント三千人ハ海陸兵士ニシテ其糧食
被服皆露都ヨリ供給シ多クハ本港高價ノキヲ假ラズ滿人
朝人ノ如キハ需用甚ク少ナレ故ニ獨ニ高アリヘルス及ヒケルネノ
如キ本港ノ巨擘ト称スル者ニ至テモ一歲販賣額ヲ問フニ僅
ク三万ルーブルニ過スト云フ而彼等ノ目的ハ本港ノ貿易ニ在ラステ
皆ニカラズスキイノ商會ニアリ此商會常ニ黑龍江頼テ水運ノ便
ヲ取り貨物ヲ東西比利亞ノ内部ニ輸ス其利益モ亦隨テ多シ
漢湖以西ハクルースク府ニ至ルノ間其貿易ハ專ラニカラズスキイ
ノ商會ニ歸ス是ヲ以テ本港貿易ノ區域ハ獨リ漢湖以南
ホレエツトヲ限ルノミ其間土地荒蕪人烟稀少橋穴居ノ俗ヲ

龍衣ヒ遊牧ノ風ヲ存ス彼称スルハノ殖民地吹瓜郡ニヨリススキイヲ
經過シ其傍近部ニ固ヨリ推知スヘクシテ而今之ト貿易ヲ
為スヤ必シモ其盛大ヲ期スル足サルナリ況ンヤ本港ニ未航スル
諸船ハ皆載帰スヘキノ産物ナキヲ以テ徒ニ砂磔ヲ載テ吃水ト
為スヲ又問クハ依レハ本港提督府ノ歲額百万ルーブルニシ
テ東察加崕岫連ニカライスキイ、ホシエツト、ニリススキイ、等ノ諸島
營及ヒ軍艦十三艘ノ給用ヲ合算スレハ全ク地方ニ當ルハノモノ
僅ニ十五六万ルーブルニ過キズ此些少ノ金額ヲ以テ遼遠ニナル
地方ヲ管理シ薄弱ナル民を維持スル何ヲ以テ土地ヲ墾墾
シ何ヲ以テ物産ヲ繁殖スルヲ得ンヤ是ハ小官ガ本港貿易ノ
未ダ遠ニ繁盛ヲ期スル能サルヲ明言スル所以ナリ若シ強テ本
港貿易ノ方法ヲ議セント欲セハ豫メ本港ノ需用ハ高スル
物品ヲ擇ミ先リ其價格ヲ定メ本港ノ商人ト結約シテ其

清流スルニ隨ヒ便船アル毎ニ漸次之ヲ輸送セハ縱令増益
ナキニモ損失ノ恐ナカルヘシ而其詳ハ載テ別冊ニテリ以上ハ
皆既閣下ノ親睹スル所ニシテ固ヨリ小官ノ暇クヲ待タサルナリ
唯小官等彼港ニ逗留シ視察ノ任ヲ辱フスルヲ以テ之ヲ概論
シ姑ク其責ヲ尽シテ一ツテ欲スルノミ謹テ浦陸紀行同付録物
産品評等ヲ呈シ以テ改上申候也

明治十年十月十日

開拓使書記官鈴木大亮

開拓長官黒田清隆殿

長官

主池官



七ヶ倉大槻直信 謹

露領ワラビオストワクハ物産販賣景況之義上申
露領ワラビオストワクハ北海道物産^{輸出}販賣^{之景況}を視
察先般彼地へ出張^{ノ際}少主池官鈴木大
亮以下四名ヲ残置實地調査^{ノ際}多々
取別^レ成之通復令々差出^ル候條以テ申
上^ス也

明治十年十月十日

開拓長官黒田清隆

太政大臣三條實美殿

西村方重地官

鈴木少重地官



下官のうらじおたり出振渡余重系浦監知行
日付録物産西坪重系相臨別賦通重系
交中控置あり為り少重系右ハ長官
殿有り太政大臣ハ重系ニ外務内務大臣
若重系元少移教あり重系教有重系重系貴官
ニ於テ夫レ少重系重系及坊成申一重系也
十ア重系一重系也

石吏

小官 曩ニ露国浦塩港汎遣ノ命ヲ奉ジ物産見本
ヲ函館丸ニ装載シ五等属村尾元長七等属大槻
直信御用係長野桂次郎ヲ携ヒ彼港ニ至ル幾ナ
クシテ金剛船ノ来ルニ會シ閣下ニ謁スルハ光
榮ヲ得一等属小野寺審一隨行シ来ル親シク閣
下ノ指畫ヲ奉シ現今販賣ノ景况ヲ視察シ将来
貿易ノ方法ヲ調査ス是ニ於テ屢露国官吏ニ訪
問シ通ク本港商賣ニ商量ス而警察長セスチン
スヤイニ囑シ見本ヲ其局ニ陳列シ豫メ之ヲ港
内ニ告知シテ衆庶ノ縦覧ヲ許シ保テ商賣ノ品
評ヲ經シニ物品ハ概テ皆^好声價ヲ得タリ間々或
ハ其價格ノ廉ナラガルト或ハ其好尚ノ異ナル

七

品類

品類

トニ因テ販賣スル能ハザル者モ亦少カラズト
多モ其最モ本港ノ需用ニ過スル者ヲ査定シ其
将来ニ消流スベキ概額ヲ考覈シテ漸次之ヲ輸
入セバ必シモ利益ナシト為サス然レ氏今小官
ノ實視スル所ヲ以テ竊ニ之ヲ論スルトキハ未
タ遽ニ貿易ノ繁盛ヲ期スル能ハザル者アリ何
トナレハ則本港ノ人口ハ滿州及朝鮮等聚散常
ナキノ派民ヲ保セテ尅万人ニ至ラズ其内殆ン
ト三千人ハ海陸安士ニシテ其糧食被服皆露都
ヨリ供給シ多クハ本港商賈ノ手ヲ假ラズ滿人
朝人ノ如キハ需用甚タ少ナシ故ニ獨ニ商アリ
ベルス及ビケル子ノ如キ本港ノ巨擘ト稱スル
者ニ至テモ一歲販賣ノ實額ヲ問フニ僅々三万

ルীগウルニ過キズト云フ而彼等ノ目的ハ本港
ノ貿易ニ在ラズレテ皆ニカライスキイノ商會
ニ在リ此商會ハ常ニ黑龍江ニ賴テ水運ノ便ヲ
取リ貨物ヲ東西比利亞ノ内部ニ輸ス其利益モ
亦隨テ多シ漢湖以西イルクースク府ニ至ルノ
間其貿易ハ專ラニカライスキイノ商會ニ歸ス
是ヲ以テ本港貿易ノ區域ハ獨リ漢湖以南ホシ
エソトヲ限ルルニ其間土地荒蕪人煙稀少猶穴
居ノ俗ヲ襲ヒ遊牧ノ爪ヲ存ス彼レ稱スル所ノ
殖民地吹瓜郡ニコリスキイヲ經過シ其傍近部
落ヲ歷見スルニ土産缺乏民力薄弱其他ノ部落
モ固ヨリ推知スベクレテ而今之ト貿易ヲ為ス
ヤ必シモ其盛大ヲ期スルニ足ラザルナリ況ン

ヤ本港ニ來航スル諸船ハ皆載歸スベキノ産物
ナキヲ以テ徒ニ砂礫ヲ載テ吃水ト為スヲヤ又
聞ク所ニ依レハ本港提督府ノ載額百万ルイグ
ルニシテ東臺加、嵯峨連、ニカライスキイ、ホシエ
フト、ニコリスキイ等ノ諸分營又軍艦十三艘ノ
結用ヲ合算スレバ全ク地方ニ當ツル所ノ者僅
ニ十五六方ルイナルニ過ギズ此些少ノ金額ヲ
以テ遠達ナル地方ヲ管理シ薄弱ナル民産ヲ維
持スル何ヲ以テ土地ヲ墾鋤シ何ヲ以テ物産ヲ
繁殖スルヲ得ンヤ是小官ガ本港貿易ノ未タ遽
ニ繁盛ヲ期スル能ハザルヲ明言スル所以ナリ
若シ強テ本港貿易ノ方法ヲ議セント欲セバ豫
メ本港ノ需用ニ通スル物品ヲ採リ先ツ其價格

ヲ定メ本港ノ商人ト結約シテ其消流スルニ隨
ヒ便船アル毎ニ漸次之ヲ輸送セバ縱令鴻益ナ
キモ損失ノ恐ナカルヘシ而其詳ハ載セラ別冊
ニアリ以上ハ皆既ニ閣下ノ親睹スル所ニシテ
固ヨリ小官ノ嗽々ヲ待タザルナリ唯小官等彼
港ニ逗留シ視察ノ任ヲ辱フスルヲ以テ之ヲ概
論シ姑ク其責ヲ尽カンテテ欲スルノミ謹テ浦
塩紀行同付録物産品評書等ヲ呈シ此段上申候
也

明治十年十月廿七日 開拓少書記官鈴木大亮



開拓長官黒田清隆殿

浦益紀行

明治十一年八月廿八日午前九時四十分黒田開拓長
官金剛艦ニ函館港ニ上ル小野寺開拓一等屬隨行シ
川村海軍御花房外務大書記官等ト同ク露國「ウラジ
ヲストツク」ヘ向ケ十時抜錨午後四時福山沖ノ小島
ヲ經テ方位ヲ西北ニ取ル域日午前十一時ヨリ西風
降雨晚ニ至テ歇マス
廿九日午後五時二十分方位ヲ北西微西ニ轉ス四時
北四十分ニ當リ初テ一山ヲ認ム
三十日午前五時方位ヲ北西微北ニ轉シ七時東北ニ
當リ「アスコル」止島及ヒ近傍ノ陸地ヲ認ム八時方位
ヲ北微西ニ變シ十一時三十分「ウラジオストツク」ニ
入ル艦上樂隊奏曲シ碇泊ノ露國軍艦「サートツ」ニ